

エキスパートに聞く：海外投資家の目から見た日本の「成長」 4

外から見た日本の「国際競争力」

ゲスト 水野 弘道氏 コラーキャピタル パートナー

聞き手 柳川 範之 NIRA 理事/東京大学大学院准教授



水野 弘道氏

柳川 海外からご覧になって、日本の国際競争力についてどう思われますか。

水野 私が外に出てから「国際競争力」について確信したことがあります。国同士の競争力を決める要素は二つあります。一つは国民の平均的なレベルの高さで、もう一つはエリート層のレベルの高さです。先進国になればなるほど、実は後者のほうが重要になります。途上国では、例えば工場を建てたら工場の従業員の平均的な教養レベルが高い国が有利ですね。言い換えれば、ルールにいかにもうまく対応するかということです。しかし先進国になると、どのように世界のルール作りに参画していくかというような話になってくる。そうすると、エリート層の競争力が、実は国の競争力を決めるわけです。

日本にはそれがあるのか、という不安を感じます。英語力然り、国際舞台での交渉力然りです。あるいは、国内の議論を国際関係において弱みと受け取られないようにする外交交渉のスキルがあるのか。政府だけではなくて、民間でも駐在員として出ている人たちが、現地のプロフェッショナルと対等にやり合っているのか、ということが重要です。

柳川 外から見て、日本のそういう面でのスキルは、世界の先進国に比べて低いのですか。

水野 低いと思います。よく英語力に単純化さ

れますが、私は日本国民全員の英語が上達する必要は全くないと思っています。ただ、そういう舞台に出る人たちの英語力が低い。

柳川 専門性が要請されることとも関係しますね。海外の金融機関で働くことになったときに必要とされる専門能力は何かということが明確になっていないのでしょうか。

水野 英語の下手な外交官がなぜ許されるのか、というレベルの話ですね。銀行でも、国内で銀行業務をやっている人が英語を読める必要は皆無だと思います。ところがトレーディングをしたり、インベストメント・バンキング業務をしたりする人たちは、シームレスに海外の情報を読めることが当然要求されます。そういうポジションにいる人たちが『ファイナンシャル・タイムズ』を読めないということが問題で、これは致命的だと思います。専門性以前の段階の問題です。

国のマクロレベルの政策とミクロのリンクがない、ということも問題です。日本の金融政策をどうしたいかということが明確に決められていない中で、金融庁や日銀の担当者がいきなりG20とかバーゼルに送られて金融規制の交渉をさせられる。彼らが優秀だったとしても、無理ですね。どういう方向性で交渉するかが示されていないからです。個々のエリート層の競争力

をとにかく高めることと、能力がある人たちが
出て行ったときに、それを活かせるような高い
水準の戦略をコンセンサスとして持つておかな
いと駄目だと思います。国際舞台に対応する個
人の戦闘力・能力を個人としても、組織として
も最低限もう少し上げないと駄目だということ
です。残念ながら小学校で英語教育をしても役

に立たないし、もし役に立ったとしても間に合
わないですね（笑い）。この調子で10年ぐらい
経ったら、日本の国際的な地位はものすごく悪
化していて、その子たちが活躍するとしても日
本のためではないかもしれない。その子たちは、
日本にいてもしょうがないということで、どこ
かに行ってしまうかもしれません。

関連記事 対談シリーズ No.56

海外投資家の目から見た日本の「成長」

ゲスト：水野弘道氏 聞き手：柳川範之

URL:<http://www.nira.or.jp/pdf/taidan56.pdf>